

SPARC/JAPAN活動と 機関リポジトリ

国際学術情報流通基盤整備事業

国立情報学研究所コンテンツ課

大場高志

SPARC運動の現状

➤ 欧米SPARCのオープンアクセス宣言

✓ 2005年SPARC実行計画

- オープンアクセスの実現を最優先課題
- 商業出版社への対抗措置 学術出版機能の分解/分散統合プロセスの推進:機関リポジトリ
- NIHへの対応:OAWG/ATA活動の中心的役割を果たす
- 既存のリソースについてのコスト削減については一歩後退
- その他、従来のSPARC戦略(BioOne, Euclid, ICOLC, 機関リポジトリ、コンサルタントサービスなど)は継続

– <http://www.arl.org/sparc/about/pp2005.html>

✓ NIHの方針:12ヶ月後にPubMed Centralにリポジトリを要請

✓ 英国科学技術委員会:機関リポジトリ支援を勧告

SPARC/JAPANの状況

- **ビジネスモデルの推進と図書館/学会間のコミュニケーション普及**
 - ✓ UniBio Press(5学会:パッケージ系)
 - 精力的な販売活動
 - 20大学以上、国会図書館などが成約
 - ✓ Euclidへの参画
 - 東工大、東北大、名古屋大、学士院
 - ✓ 独立系電子ジャーナルの大学図書館との交渉不調(IPAP, Mate. Trans.)
 - 図書館側の財源不足
 - 学会(SPARC/JAPAN)側の説明不足

- **その他の状況**
 - ✓ Project Museとのコンタクト(Monumenta Nipponica)
 - ✓ J-STAGE上の創刊電子ジャーナル(電子通信学会Express)
 - ✓ 分野別パッケージ化への苦闘(化学系)
 - ✓ 学会事務センターの破産(医学系)
 - ✓ J-STAGE等への遡及入力

SPARC/JAPANの状況(2)

➤ 今後の課題

✓ 日本の学術発信状況の認知不足

- 50%近い研究者は知らない

✓ 学会事務体制の未確立

- 学会事務センターの破産
- 海外出版社との不適切な契約

✓ オープンアクセスムーブメントとサイトライセンス

- J-STAGEのアーカイブ方針：NIIとの仕切りと連携
- NII-ELSは学会が公開時期を定める

論文情報のオープンアクセス

➤ 日本の学術コミュニケーションの現状

✓ 電子ジャーナルの創出(学会の立場)

- ビジネスモデルの創出
 - 印刷体モデルから電子ジャーナルへの移行への影響
 - 冊子体の減少と会員数の減少
 - 学会、大学図書館、研究者間の研究成果の(無償)循環の構築

✓ 研究インパクトの流通(研究者の立場:Harnad)

- 研究論文はピアレビューによる評価を通したものでなければならない.
- インターネット環境は、オープンに研究論文を流通させるインフラ環境を可能とした

✓ 論議は始まったところ

- オープンの意味:ピアレビューのコストや電子ジャーナル作成コストは、利用者である研究者、図書館が利用できる料金で
- 最終的には、発信流通を担保できるコストを回収できる(継続的に発行できる)モデル(投稿料モデルや公開遅延など)で、オープンアクセス(フリー(無料))として流通させることが主流

SPARC/JAPANのビジネスモデル

➤ SPARC/JAPANのビジネスモデル

- ✓ 学会と大学図書館との学術コミュニケーションを実態としてモデル化
 - 図書館が支払える額
 - 学会が電子ジャーナルを発行できる額

➤ オープンアクセス

- ✓ 学会が選択するオープンアクセスには中立
- ✓ 研究論文は最終的にはオープンでネットワーク上を流通することが重要
- ✓ 投稿、査読、編集、出版過程という持続する発信過程の中で最終目標をどのような基盤を整備すると実現するか
- ✓ ビジネスモデル(意識環境の変革)と機関リポジトリ

NII-メタデータ・データベースと機関リポジトリ

➤ 機関リポジトリ (IRP)

✓ 大学発信サーバの支援(日本の状況から)

- 学内学術情報資源のリポジトリ体制の構築と各大学・大学図書館の自立した連携体制
- ハード、ソフト、資源としてのリポジトリ構築支援
- 研究者自身の研究成果発信体制の普及: 大学内研究者によるオープンアクセスへの道



- ### ✓ GeNii(学術コンテンツポータル): 大学の教育研究資源 (図書館所蔵資料、国内外論文、新たなコンテンツなど) のメタ収集とポータル化による基盤の整備